
聞こえない「ただいま」を……

スティーブン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聞こえない「ただいま」を……

【Nコード】

N0009I

【作者名】

スティーブン

【あらすじ】

ずっと抱えていた少女の悩みは、いつもの日常の中で、あの人によつて彼女の中でゆつくりと解きほぐされる。いつか、あの人が言ってくれた事。あの人が与えてくれたもの。全てを思い出しながら、また一つ、新たな物語へ繋いで行く。

考えたことがないわけじゃない。

ひよっとしたら自分も思うこともあった。

だから、彼女達を見て羨ましく思わなかったと思うこともない。

綺麗に着飾って、可愛く化粧をして。自分もそんな風にはやってみたかった。

でも思うだけ……いかんせん自分にはそういう才能はなかった。

不器用と言うのだろう。努力で何とかなると、今までは思っていたが、こればかりは駄目だった。

そもそも私は、女である前に武術家でもある。

一切のそういうものは邪念として捨てなければならぬのかもしれない。

けど、やっぱり私も年頃の娘だった。それが悔しいのか、嬉しいのか…自分でもわからない。

綺麗になりたい、可愛くなりたいというのは、頭で分かっただけで体は否定できなかった。

段々と女に仕上がっていく体は、確実にそういうことをしたかがつていた。

自分の体だから、よく分かる。

でも……今となつては、それももう無理。

戦つてばかりいて、こんな傷だらけになつた体では、私に着られる服の方が可哀想だ。

——そう思っていた。

「^な風ちゃんは可愛^きいんだから、ちゃんとおめかしなくちゃ駄目なの」

沙和^{さわ}だ。

私の親友で、私が憧れている女性の一人でもある。

彼女は着飾るのも、お化粧をするのも、自分より遥かに上手い。

そんな沙和が、私にこうしてくれるのは、嬉しいというより何だかムズ痒かった。

多分私は照れてるんだろう。それを隠すのに精一杯だった。

そうやって沙和から逃げ回っていると――あの人がやって来たんだ。

「二人とも何騒いでんだ？」

北郷ほんごう一刀。世に言う天の御使いとして知られ、私たちの隊長でもある。

大して強くもなく、頼りになると言うわけでもないのに、何故か変に惹かれる存在。

この魏の国の人も、彼の変な魅力に気付いている者も少なくないらしい。

嫌がる私に自分が仕立てた服を着せようと、現在進行形で着ている服を引っ剥がしてくる沙和を止めて貰おうと隊長に声を掛けるもそれも空しくすぐさま意気投合してさらに敵勢力が拡大してしまった。

結果的に言えば、結局は着せられてしまった。

沙和が言うには、この上着のただば感が、隊長が言うには裾と靴下の間の絶対なんたらがいらいらしいけれど、自分にはまったくわからない。というか恥ずかしい。

けど、二人に可愛いと言ってもらえた。

『私』が着た『この服』じゃなくて、『この服』を着た『私』が可愛いって。

この時もまた、私はむず痒かった。嬉しいかどうかは…わからない。

この後、三人で城中を回って、將軍軍師たちに見せて回った。

私は反対したけど、沙和が大丈夫なのと言って私の手を引つ張つて連れ出した。

この上なく恥ずかしい。今私の顔は唐辛子より真っ赤だと思う。

「敵！」

この第一声はよく分からなかったけど、どうやら少数勢力を一瞬にして敵に回してしまつたらしい。

要するに、比較的着痩せする私が、色々ところが強調されるこの服を着ることによって判明したある一点に不満を持つたらしい。

ちなみに少数勢力と言うのは、桂花^{けいふあ}さまを筆頭^{りん}に稟^るさま、季衣^{きい}さま、流琉^{るる}さまだった。

どういつものを旨にした勢力かは……察してあげてください。

隊長と沙和の助言で、とりあえずこの場を離れることになった。

次に見てもらったのは霞^{しや}さまと真桜^{まおう}の二人。

二人ともお茶を飲んでる最中^{さいちゆう}だったらしいのだが、そんなことは気にするなと迎えてくれた。

真桜も私の親友の一人。村でも小さい頃から沙和と三人でよく一緒にいた。

ちなみにちょっと外れるけど、村の男子たちの目を一番引いていたのはこの真桜だったりする。

人当たりがよくて、容姿もよければ当然といえばそうだろう。
だからと言うわけではないけど、やっぱり真桜も私が憧れを抱いた存在。

物腰の柔らかい器用な性格は、私には到底真似できないから。

「おつ、風。今日はまた、えらいカワイイ服着てんな〜！」

「よう似合ってるわ。どいう風ふうの吹き回しや？」

二人は私の姿を見て驚いて、その後褒めてくれた。

でもそこからここをどうしたらいい、ここはこうしたらいいなど、まるで私を玩具にでもするように論争し始めた。

最終的にはこのままでいいということになっていたけど…なんだろう、すっごい疲れた。

城壁の上に姿が見えたらしく、言ってみるとそこには風ふうさまがいた。

いつものようにまた日向ぼっこか、ぼーっと空を眺めていたのか
もしれない。

「おおー、かわいいですねー」

第一声はそれだった。

いつものように伸びのある言い方で、風さまにまで褒められるとは思わなかった。

ぼんやりとしながら微笑むと、手を伸ばして私の頭を撫でてくる。何と言うかやっぱり風さまは…和む。

というか、風さまは思いのほか褒めてくる。今までで一番の数を褒めてきた。

この方のことだから、もしかしたら一言一言に反応して顔を赤くする私を面白がっているのかもしれないけど。

すると風さまは隊長を引っ張って、なにやら内緒話をし始めた。何を話したのか地味に気になったけれど、少し話すと私を呼んで

……

「女たらしのお兄さんが、獲物を狙う鷹の目になってます。

目を合わすと妊娠してしちゃうので、気をつけてくださいねー？」

と言ってきたときには、思わず隊長から後退ってしまった。

確かに始めの頃は、緊張で心臓が弾け飛びそうなほど、そこは大それた場所だった。

だが今となってはちゃんとした自分の仕事場であり、数日に一度

は必ず訪れる。

そうこうしている間に、慣れる事は出来た。

「沙和、さすがにここはやめようっ ……」

しかし、この場所に慣れてから数ヶ月。

ここがこんなにも凶悪な場所に見えたことはない。

例えるならばここは、あの『難攻不落絶対無敵七転八倒虎牢関』
そのもの。

それも元董卓陣営三將軍の呂布、華雄、張遼が控えているそこに、
自分ひとりで向かっていくようなそんな感じ。

私にとって今の玉座の間には、それほど存在感が見えていた。
何せ今この中に居るのは、魏の国王曹孟徳さま。

それにあの夏侯姉妹まで居られるのに、こんな格好で……。

しかし沙和は全く聞いてくれない。

心配ないのと言って手を引いてつかつかと入っていった。

中にはやっぱり華琳さまと春蘭さま、秋蘭さまがいた。

華琳さまたちは突然入ってきた私たちに首を傾げていたけど、沙
和が私を前に引っ張り出すと小さく声を上げた。

（だから言ったのに…沙和のやつ……っ）

華琳さまと言えば、様々な分野の頂点に座っている、私たちから
見ればまさに超人。

勿論流行に即した衣服や髪型も例外じゃない。

確かに沙和の意匠は私から見ても凄いけど、私が元じゃ褒めても

らえるわけない。

「ほお、いい服を着ているな。凧」

「そうね。その衣装は沙和の見立てかしら？」

「……あ、はい」

ほら、褒められたのは沙和の服だった。
やっぱり私は……

「——本当によく似合っているわ」

「え……？」

「うむうむ」

え、今…華琳さま……。

呆然と呆けていたしていた私の肩を、ほんと誰かが手を置いてきた。

ゆっくりとしか動かない首を振り向かせると、そこには人懐っこい笑顔を浮かべた隊長がいた。

「よかったな、凧」

その言葉で、私はようやく華琳さまに褒められたということを理解した。

「は、はい。華琳さま……あ……ありがとうございます！光栄……です」

あまりの嬉しさに涙が出てくる。

さっきまではムズ痒くて、嬉しいのかどうかよく分からなかった。でも今ははつきりとした嬉しさがあるのがわかる。

勿論ムズ痒くはあったけど、今感じる喜びには比にならないほど小さい。

すると沙和が横から抱きついてきた。

「ほらね、言ったでしょ？心配ないって」

そう言う沙和は、自分のことのように嬉しそうだった。

もしかしたら沙和も、私と同じくらい緊張していたのかもしれない。

そう思うと、自然と感謝の念が湧いてきた。

「うん……ありがとう、沙和」

「ふう……」

沙和はその後、街に買い物に行くといって別れた。
今は、隊長と一緒に城壁にいる。

日は沈みかけていて、西の方向から赤々と照らしてくる。
ちなみに今のため息は気疲れのもの。

裾を摘んで、改めて今日は凄いことをしてしまったと実感した。

「みんな褒めてくれてよかったな」

「はい、その……こういう方面で褒められるのは何と言うか……ムズ
痒かったです」

「じゃあもつと着飾って綺麗になって、皆からたくさん褒めて貰え
れば、慣れるんじゃないか？」

元が魅力的なんだから、もつともつと綺麗になれると思うぞ？」

「……あ、ありがとうございます……。しかし……わたしは、その
……」

「うん？」

今日のを見てまた思い知らされたこともある。

私と沙和とで天と地ほどの差がある意匠の才能のこと。

こういうのが今の流行だったなんて、沙和にこれを着せられたときに初めて知ったのだ。

私にはこういう才能はない。

そう隊長に、半ば愚痴のように呟くと……

「なら、沙和に色々と相談してみたら？」

あいつならそういうの好きだし、面倒見もいいしさ」

それは随分前から思っていた。

単純に恥ずかしいというのもあったし、相談するのを躊躇っていたけど。

「沙和は寧ろ、喜ぶと思うぞ？今日の見てたら……わかるだろ？」

今日の沙和。

霞さまや真桜、風さま、春蘭さまに秋蘭さま……そして華琳さま。

皆に褒められた時、その時に本当に嬉しそうな顔をしていたのは、沙和だった。

「……………（コクッ）」

隊長は少し笑いながら私の横に着て壁に身を預けた。

「まあ、今日は聞き飽きたと思うけどさ……やっぱり似合ってるよ」

隊長にそう言ってもらえたのは、素直に嬉しかったし喜べた。

でも、この時ばかりは何故か、どう返せばいいのか分からなくなってしまった。

夕暮れ時特有の涼しい風が通っていく。

極度の緊張と恥ずかしさで火照った体にはとても気持ちよかった。それからしばらく、私も隊長も口を開くことなくどこでもないところをただ眺めていた。

少し今日のことを振り返ってみる。

沙和が突然服を持って部屋に現れたときには、正直何がしたいのか分からなかった。

それから隊長が着て、あつという間に着替えさせられて、皆に見せて回された。

本当は似合わないと言われるのが怖かった。

ずっと懂れていたことだから。

ずつとやってみたい事だったから。

可愛くないと言われるのが……本当に怖かった。

でも、皆は言ってくれた。

——可愛い

——似合っている、と

むず痒かったのは本当。

でも多分、私はそれ以上に——嬉しかったんだと思う。

そして、今隣にいるこの人も言ってくれた。

この人はいつも飄々としてて気が多いけど、伝えてくれる気持ちとかは全て全力なんだろう。

だからこんなに、体の芯に染み込むんだ。

温かい、優しい、心地いい、この人の言葉が——。

「……………私は」

「うん？」

「私は元々こういう格好は嫌いではないのですが……………いや、寧ろ好きなのですが……………」

隊長は静かに黙って聞いてくれている。
そういうところも、話す側としてはやっぱり優しいし嬉しい。

「自分には似合わないし、何もせずに初めから諦めていたのです。
だから……………今日は勇気を出してよかった」

言い終わると、隊長は微笑んでそうだなと相槌を返してくれた。

「隊長と沙和のおかげです。本当に……………ありがとうございました」

自然と頬が緩んで笑顔がこぼれた。

自分で言うのもなんだけど、いい笑顔を出せていると思う。
それくらい、今日は充実していた。

「私……………これから、頑張ります」

誰よりも…隊長に褒めてもらえる。
それが今は嬉しい。

だから、頑張れると思う。

「うん、応援してる」

「……はい」

そう、応援してくれる。

隊長が……私の、大切な人が――

「……この服」

いつだったか、もう随分前のことだに思える。

この服を着た私を、あの人は可愛いと言ってくれた。
この服を着て、あの人に初めて愛してもらった。
何度も唇を重ねて、あの人の温かい体に触れた。

——ただ、嬉しかった。

でも、隊長は……私の、大切な人は——もういない。

三年前：魏が、華琳さまが天下を統一した直後、隊長はこの世界から去った。

当然、私は泣いた。

真桜も泣いていた。沙和も泣いていた。

魏の人たちも、泣き方は様々だけど、涙を流していない人もいたけど……皆泣いていた。

隊長も罪深い人だ。

ここまで深い絆を築いておいて、別れも言わずに帰ってしまうなんて。

鏡の前に立つて、服を体に当ててみる。

そのまま目を瞑ってみると、隊長がいた頃の思い出がどんどんと流れ込んでくる。

するとまた目頭が熱くなり、頬に一筋伝っていくのがわかった。

——寂しい。

隊長が傍にいてくれないのがこの上なく寂しいし悲しかった。

華琳さまは、彼がいてくれたから天下平穏が訪れたと言っていた。

それを聞いて、否定するものは誰一人いなかった。

でも、だから彼は役目を終えて帰っていったんだとも言った。

それは、誰も納得しなかった。勿論私も。

「……う……くつ……たい……ちょ、う」

気付いたら、隊長を呼びながら服と自分の体を抱きしめていた。
足に力が入らなくなつて膝から崩れる。

もう随分前に受け入れたはずなのに。

隊長のことを思い出すと、こんなにも心が痛くて苦しい。
本当に胸が潰れてしまいそうだ。

——隊長が欲しくて欲しくて堪らない。

——あの温もりが、優しさが欲しい。

——隊長に、抱きしめてもらいたい。

「うおーい、風ー!」

「早くしないとみんな来ちゃうのー」

「っ!?!?」

部屋に行ってから戻ってこない私を心配したのかもしれない。
真桜と沙和が様子を見に来たみたいだ。

「うう（グジグジッ）……ああっ！」

涙と鼻水を隠そうと必死になって、抱いていた服で拭いてしまった。

「入るで？」

「あつ、ちょ、待つ」

私の制止も聞かずに扉を開けて二人が入ってきた。
咄嗟に扉に背中を向けて顔を隠す。

「ん？どないしたん、風？」

「何か隠してるの？」

何でこの二人はこういうことに関してはこんなにも鋭いんだ。

「な、何も隠してなんかないっ」

「……怪しい」

「怪しいの」

「え？ちょ、うわっ！？」

二人はそう言って座り込んで後ろを向いてる私の体を掴んで翻し

た。

「ほれえ、何を隠…し、て」

「……風ちゃん？」

私の顔を見た瞬間二人とも固まるように動きを止めた。
当然だろう、涙も鼻水もまだ出続けてるんだから。

「……くっ」

肩を掴んでる真桜の手を押しつけて、服に顔をうずめる。
服が汚れてももう関係ない。とにかくこの顔を二人に見せたくな
かった。

「「………」」

粗方泣いて涙が止まったのを見計らって、最後に服で顔を拭って
顔を上げる。

服はその……びしょ濡れだった。

「……あ」

真桜も沙和も、私の前に腰を下ろしてジッとこっちを見ていた。二人ともとても辛そうな顔をしていたけど、涙は流してない。何故か私だけ泣いてたのが悔しく思う。

「……二人は……強いな」

「……風？」

「私はこんな無様に、子供みたいに泣いてしまっているのに……二人は

「あほか……え？」

真桜が小さく一言言つて、私の言葉を遮った。

「沙和も、何回も泣いちゃったの」

「うちらかて、悲しいに決まっとるやろ……」

そうだった……。皆隊長のことが好きだったんだ。

悲しくないはずはない。隊長のことを想って泣いてしまうのも、仕方ないことなのかもしれない。

季衣さまや流琉さま達が厨房で泣いているのも、何度か見かけた。

風さまもぼーっとしたり、居眠りする回数が増えた気もする。

稟さまは、治りかけていたと思われた鼻血もまた再発したし。

霞さまも毎日のように酒を飲んでは時折暴れまわったり、泣きつ

いてきたりしていた。

張三姉妹は、歌に関してはよくわからないけど、張りがなくなつたような、全体的に元気がない。

桂花さまは、稀にあいつがいないと張り合いがないとかぼやいているのを聞いたことがある。

春蘭さま秋蘭さまは、あまり直接的な反応は見せないけど、やっぱり心なしか寂しそう。

華琳さまはさすがというか、全くそういう仕草は見せない。けど、それが逆に怪しい。

前から完璧ではあったけど、今はあまりにも完璧すぎる。

隠そうとするあまり際立ってしまうのだろう。華琳さまらしい反応だった。

真桜も沙和も、私が見ていないところで、きっと泣いていたのだろう。

そう思うと、ちょっと安心できた。

「でもね、沙和…思うの」

「? ……」

「隊長、知らない間に何処かに行って、ふらっと帰ってくることも多かったの。」

だから今回も……隊長はどこかに出かけてるだけ。

だからまた、いつもみたい……ふらっと、帰ってくるんじゃないかって」

「——」

それは、沙和らしい前向きな考えだった。

多分、自分にそう言い聞かせるのに、沙和は何回も泣いたんだと思う。

そう想像できるほど、沙和のその言葉は沙和自身の強い想いが込められているのが分かった。

でも確かに、その方が隊長らしい。

いつも通りに、あの人懐っこい笑顔を浮かべて帰ってくるんだ。

『ただいま』とか飄々とした態度で、こっちの気なんか知らないで帰ってくるんだ。

「ええな、そのほうが。いかにも隊長って感じがすんで」

「……ああ」

そうだ。そもそも、あの人がいなくなるはずなんてないんだ。

隊長が私たちを置いて何処かに行くはずなんてない。

約束とか、そういうものなんて必要ない。

ただ“そう”だから、“そう”なんだ。それが事実なんだから。

濡れて汚れた服をたたみ直して、棚にしまう。

それを見て二人は、立ち上がって私に微笑んでくる。

私はそれに——笑顔を返した。

「ほなら行くで、風」

「もう蜀の人も呉の人も来ちゃってるの。急がないと華琳さまにどやされちゃうの」

一度頷いて二人に付いて部屋の外に出る。

外はよく晴れていた。

どこまでも澄み渡るような空に浮かぶ雲。

あれは、一体どこから来ているのだろうか？どこに行くのだろうか？

ひよつとすると、今隊長がいるところから来ているのかもしれない。

隊長のところに行くのかもしれない。

——そう、こういうことだ。

運命の扉は人の想い一つで開く。

それに気付くかは私次第だけど、絶対に大丈夫。

想いは運命の扉を開き、開かれた扉は世界を繋ぐ。
例えば住む世界は違っても、想いが繋がり重なれば、また逢うことが出来る。

だから私は、隊長を想って扉を開く。

隊長も扉を開いていることを信じて。

そしてもし、世界が繋がって、また隊長と出会ったことができたなら

……そしたら——

——隊長……、おかえりなさい。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。ご意見・感想等ありましたら、よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0009i/>

聞こえない「ただいま」を.....

2010年10月28日08時14分発行